

我が家に書斎はない。家族共有の書棚がある。蔵書量は決して多くはない。引越しのたびに処分と整理を繰り返すうちに自然とそうだった。ありきたりの書棚だが、背表紙を眺めていると家族それぞれの興味や関心、悩みや躓きなどが凝縮されているように見えてくる。共有の書棚は、頭の中や心の中を互いに覗き合っているようで、たとえ家族でもなんだか照れ臭い。もちろん、私の本もあるがどれも大したものはない。それでも学生時代には身の丈に合わない本に挑戦したこともあったので、もしもそのときの何冊かが残っていたら、間違いなく家族への無言の威厳となり、私を見る眼も変わっていただろう。そんな取り留めのない妄想に耽っていると、突然、妻が話しかけてきてハッと我に返った。

「そろそろ、また整理しようか」

何のことだろう。返事に戸惑っていると、

「これ、いくらぐらいになるかな」と無邪気に続けた。

妻は私の視線を追うようにして、収納スペースに余裕がなくなった書棚を何とかしようと思い始めたようである。私はもっともかもしれないと思いつつ有耶無耶な返事をしてみたが、内心では穏やかではなかった。というのも、我が家は、現在の住居へ引っ越す際、何かに取り憑かれたかのように「モノ減らし」に躍起になっていて、書籍類は真っ先にその標的にされたのである。確かに有用無用含めて現在の4～5倍の蔵書量があった。折しも「断捨離」が流行りだした時期でもあった。断腸の思いで手放した本は数えきれない。私もブームに踊らされ、このときかなりの断捨離を執行した。『もの食う人びと』（辺見庸著）は私のミスで我が家を去った。学生時代に古本屋で苦勞して見つけ出した寺山修司の文庫本など、あのときの判断は間違いだったと後悔する数冊に心が痛むことがある。この頃から本は買うものから借りるものへと家族の意識が変わっていった。

妻の提案に即答できなかったのは、かつての苦い記憶が蘇ってきたからだ。秘密裏に書棚の整理を強行する妻ではないと信じているが、もし、ここから数冊残すならばどれを選ぶか考えてみた。つい手が伸びたのは『深夜特急』（沢木耕太郎著）だった。『中原中也・詩集』もいい。有事に備え（もとい、読み返したくなり）、そっと鞆にしまい込んだ。

さて、我が家の書棚に俄かに再整理の動きが出てきた。逆行するようだが、いま私には購入を検討している一冊がある。昨年、全世界で百万部以上売れたベストセラー『FACTFULNESS』（ハンス・ロスリング著）だ。千八百円という相当額の投資は実に久しぶりだ。「少し待てば図書館で借りられるでしょ」と冷ややかな声が聞こえてきそうである。でもいい。本の内容や回し読みをするであろう家族の評価によっては、この投資が突如として無言の威厳に変わる可能性が十分にあるではないか。さあ、本屋へ急ごう。

これは、3月1日に発行となった梁川高校「図書館報」に載せられたある教員の原稿である。私はこの先生に感謝している。私のような人間のそばにいる人はなかなか大変である。自分を客観視してそう思う。この先生は私の家内の次に苦勞をしているのではなからうか。この先生が生徒の前で話すことがある。いい話をする。保護者向けのメールの文面をつくった。さりげなくいい文章である。この先生にはハートがある。だから生徒にも保護者にも響く。この先生について言葉で説明するよりも「文は人なり」である。文章を読んでもらったほうがよい。梁川高校の教頭である遠藤健さんの文章である。図書館報だけに収めておくのはもったいない。日頃の感謝の意を込めて紹介する。